

しきしまのみち略史・覚書

夜 久 正 雄

一 敷島の道

「しきしまのみち」（敷島の道）といふ言葉は、五七七七七・三十一文字・短歌形式の和歌のことをいふが、和歌を文芸の一ジャンルとしてだけ考へるのではなくて、“日本人のふみゆくべき道”として考へる場合に、使はれる言葉である。この言葉は、『千載和歌集』『新古今集』の序文に登場するが（後述）、和歌の「道」としての意味を、最も深く究められたのは明治天皇さままであらうと思はれる。明治天皇は、実に九万三千三百余首といふ未曾有の和歌をお遺しになられたばかりでなく、和歌の「道」としての意義について、数々の和歌をお遺しになられたのである。その中には、御自身の作歌について、作歌がお心の最上のなぐさめであるといふお歌とともに、次のやうなきびしい自督のお歌を拝するのである。

たかねにはのぼりえずとも言の葉のまことのみちをたえずたどらむ（「歌」明治四十三年）

おこたらずまなぶとすれど言の葉の道のまことはしられざりけり（をりにふれたる「明治四十五年」）

この二首は天皇の御晩年のお歌であるから、既に少くとも八万首近くのお歌をおよみになってをられたとみなくてはならない。『明治天皇御集』を拝誦する者は誰でも、その一首一首が、お心のおもむくままに自由に大胆によりあげられてゐて、すばらしいお歌が、つぎつぎにあらはれてくるのに驚嘆するにちがひない。まさに、「歌聖」とでも申上げるほかない大歌人であられると讃嘆の思ひにうたれるのである。しかもそのお歌の数が十万首に近いといふのであるから、その御修業のきびしさも、未曾有のことであると思はれる。しかもなほ、右の二首のやうなお歌を拝するのであるから、天皇が「敷島の道」にどれほど御熱心であられたか、といふより、天皇さまの御修養御学問の中心がこの道であったことが深くしのばしめられるのである。「御趣味」といふやうなものではない。そのことは、次のお歌によっても明らかである。

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとはおもはざらなむ（「述懐」明治四十年）

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道（「述懐」明治三十七年）

明治天皇さまは、御自身がこのやうに「敷島の道」におつとめになられるとともに、この道を国民にもおすすめに
なられたのである。

いとまあらばふみわけて見よちはやふる神代ながらの敷島の道（「道」明治四十年）

言の葉のまことの道のひとすぢをわくるいとまのなからまじやは（「述懐」明治四十一年）

「新年歌会始」は明治二年に新年の宮中行事として確立されたのであるが、明治天皇さまはこの行事を重んぜられ、明治七年からは一般の国民の詠進をお許しになられ、かつまた預撰歌以外の詠進歌をもお手もとに置かれて、折にふれて御覧になられたとのことである。それは「敷島の道」本来の姿とも言へるが、またこの道を天皇が国民におすめになられた、そのお心のあらはれとも拝することができるのである。次のお歌にさうしたお心もちを如実に仰ぐことができる。

千万の民のこゝろを年毎にすすめてもみるぞたのしき（歌）明治四十一年）

上つ代のあとにならひて敷島の道をぞ祝ふ年のはじめに（祝言）明治四十二年）

（明治天皇のお歌については、明治神宮編『新輯・明治天皇御集』から引用、括弧内「」は御題、年次は『御集』に拠る御作の年代）

明治天皇の「敷島の道」に関するお考へについては、筆者は、一に三井甲之先生の『明治天皇御集研究』（昭和三年東京堂初版、昭和五十二年国民文化研究会復刊）『しきしまのみち原論』（昭和九年原理日本社刊）に拠って学んだのである。

（なほ本項については、拙稿「『敷島の道』といふ言葉をめぐって」——『亜細亜大学教養部紀要』第九号、昭和四十九年——参照）

二 「八雲立つ」の歌

さて、「敷島の道」といふ言葉は、『千載和歌集』や『新古今集』の序文あたりにはじめてあらはれる。したがって、「敷島の道」の自覚が、その頑強く意識されたとしても、和歌を作ることにはすでに古くから行はれてゐたことはもちろん、和歌をよむことの意味についても、古くから考へられてゐたのである。

五七五七七・三十一文字——つまり短歌形式の和歌の最初のもものは、須佐之男命の「八雲立つ」の歌であると信じられてゐた。『古事記』『日本書紀』が、さう記し、『古今集』の「序」が、それにしたがった。『古事記』では、次の通りである。

「かれ是を以て其の速須佐之男命、宮作るべき地を、出雲国に求ぎたまひき。ここに須賀の地に到りまして詔りたまはく、吾此地に來まして、我が御心すがすがしとのりたまひて、其地にも宮作りてましましける。かれ其地をば、今に須賀とぞ云ふ。この大神初め宮作らしし時に、其地より雲立ち騰りき。ここに御歌作したまふ。其の御歌は、

八雲立つ 出雲八重垣 つまごみに 八重垣作る その八重垣を

ここに足名稚神をめして、汝は我が宮の首たれとのりたまひ、またの名を稻田の宮主須賀の八耳命と負はせたまひき。」(幸田成友校訂『古事記』岩波文庫——すなわち本居宣長の訓の『古事記』に拠る。)

この「八雲立つ」の歌が、五七。五七。七。の定型をとつてゐることから、最古の和歌であるとは見えない、とい

ふことで、いろいろ説があるが、いまはそれにはふれない。この歌が須賀の宮を作った時に詠まれた時の歌であるといふ叙述について考へてみる。

この叙述を「古言」のままに読めば、須佐之男命は、宮を作るべきところを求められて、この地に來られた時、お心が「すがすがしい」とおしやつて、そこに宮づくりをなさった。須佐之男命は、すがすがしく感じられる土地を求めて、その場所を得られたといふことになる。そしてそこに宮を作られた、その時、雲が立ちのぼったので、それはあたかも須賀の宮を八重にかこむ八重垣のやうに見えた。そこで、このお歌をおよみになった、といふのである。「すがすがし」は、「須賀須賀斯」と書かれてゐる。それで、この語音には、『古事記』の編者が特に注意したことがわかる。

須佐之男命といふ男性神は、父大神イザナギノミコトから、「海原を治らせ」といふ、苦しい御命令を受けたので、その任務につかずに、いつまでも号泣するのみであった。そのために高天原には数々のわざはひが生じ、イザナギノミコトは追放をお命じになったのである。そこで、須佐之男命は、亡き母をしたふ御自分の氣持を、姉の神なる天照大御神に申上げようとして、高天原へのぼってゆく。命の真実（「清明心」）はウケヒ（誓約）によって証せられたが、「勝さび」に、命はまた高天原において乱暴をはたらき、遂に天照大神の岩戸がくれといふ大事件をまきおこしてしまふのである。これは、八百万神の努力で解決はできたが、命は、ふたたび高天原を「神やらひ」に、追放される。そこで、肥の川の上流の鳥髪の地に天降って、そこで、八股大蛇を退治して、奇稲田姫を救ひ、大蛇の尾からは、神劍を得て、これを天照大神に奉る。命の「清明心」はこれで実行せられたのである。そして、この須賀の宮の宮作りをなさる、といふ筋である。

波瀾万丈の英雄神が、出雲の国の開拓の祖として定着された、それが須賀宮といふことにならう。その宮作るところを求めて、スガスガしい土地を求められたのであるから、この言葉のもつ意味には深いものがあると見なければならぬ。

すがすがしい心！　これが日本人の求める心持ではないだらうか。全力をつくし切ったあととすがすがしき、その心に、美しい自然があひ応ずるのである。その時「雲立ち騰りき」とは、立ちのぼる雲と命のお心とが相ひ応じたといふことにちがひない。そこで和歌が生れる。「八雲立つ」といふ、日本の最初の和歌と信じられた須佐之男命のお歌と、日本人の求める、執着からときはなされた「すがすがしき」とには、深いつながりがある、といふことを、この伝承は語っているのである。

「清し」「さやけし」は『万葉集』の歌に見られる美的感覚の中心であるが、それはまた「倫理的感覚であると同時に、また宗教的・神道的感覚であった」（古川哲史博士『日本的求道心』から）と言はれるのである。和歌がまことを原理とすることもここに通ずるのである。人は、まこと（真言・真事）——懺悔、告白によって救はれる——すがすがしくなるのである。これは、古代もいまも変らぬ人の心の真実である。

私は、この「八雲立つ」の歌とその背景を語る『古事記』の叙述を読んで、次の明治天皇のお歌を憶ひ出さしめられた。

さしのぼる朝日のごとくさはやかにたまほしき心なりけり（「日」明治四十二年）

人ごころすがすがしきはほがらかにあけたる空にむかふなりけり（「朝」明治四十二年）

須佐之男命がすがすがしい心をお求めになられたお心と、自然と一如になったお心とは、明治天皇のお歌に通ずるものがある。和歌の起源をこの「八雲立つ」の歌に求めた古人の知恵は、「敷島の道」の永久生命を予感し信じてゐたにちがひない。

また、須佐之男命のお歌が、結婚のよろこびのお歌であることも忘れてはなるまい。恋愛は和歌の中心テーマのである。

そして、この伝承は、また、神——民族の祖先・英雄神が歌をよむといふことをもあらはしてゐて、つづいて、地上にくだられた神々ならびに天皇さまがたが、歌を詠まれるといふ日本の国の文化伝統の起源ともなったのである。今年（昭和五十四年）の六月、古事記学会が松江市の島根大学で開催されたのを機に、私は、須佐之男命が「かれやらはえて、出雲の国の肥河上なる鳥髪の地に降りましき」（『古事記』）といふ鳥髪山（現・船通山）の麓の、横田の玉鋼の工場をたづねて、さらに、肥の川ぞひと見られる、稲田姫をまつる稲田神社、須佐之男命をまつる須賀神社をたづねることができた。そして『古事記』の記述が、日本の風土に密着してゐることを、千二百年後の今もなほ、ひしひしと感ずることができた。「八雲立つ」出雲といふ壮大な出雲の「八雲」をも目で見ることができた。

さて、和歌の起源を右のやうに須佐之男命の神詠とする『古事記』は、さらに多くの歌謡をそれぞれの物語の中にあげて、その歌謡のもつ意義を説明してゐるのである。歌謡の製作年時を推論して新しいとか古いとかいふ前に、この伝承のもつ、つまり『古事記』編者のもつ和歌についての考へに注意しなければならない。しかしいまはその一つについての解説は省略して、あとはただ項目を列挙するにとどめる。その一つ一つを検討し、『古事記』全体を通して見れば、和歌の社会的倫理的宗教的意義は説き尽されてゐるやうにさへ思はれる。

『日本書紀』との比較も大切であるが、歌謡の文学的価値についての判断は、書紀の編者の見識は、古事記編者の見識に及ばないと思ふ（拙論「記紀歌謡研究寛書」『国語と国文学』昭和十八年十一月）。

三 『古事記』の和歌の背景

『古事記』には、非定型の「歌謡」が数多く載せられてゐるが、いまここでは、三十一文字・短歌形式のもののみに限ることとする（歌の第一句をあげるにとどめる）。

- 一 豊玉昆壳命（海神の女）と日子穗手見命（火遠理命・山佐知昆古）の別離の際の贈答の歌——悲恋の歌である。「赤玉は」と「沖つ島」。
- 二 神武天皇の伊須気余理比売との御結婚の歌。「芦原の」。
- 三 伊須気余理比売が、その皇子たちに、当芸志美美命の謀を知らさうとなさったお歌二首。「佐葦川よ」「畝火山」。
- 四 倭建命が出雲建を討ちとられた折の御歌——一種の勝鬨である。「やつめさす」。
- 五 弟橘比売命の、倭建命の身代りとして海に入らうとなさった時の別離のお歌。「さねさし」。
- 六 倭建命の辞世のお歌。「乙女の」。
- 七 忍熊王の辞世の歌。「いざ吾君」。
- 八 応神天皇の国見のお歌。「千葉の」。
- 九 大雀命が髪長比売を父天皇からいただいた時のお歌二首。「道の後」「道の後」。

- 一〇 応神天皇が渡来人須須許里の酒に酔ってよまれたお歌。「すすこりが」。
- 一一 大山守命の辞世の歌。「千早ふる」。
- 一二 仁徳天皇が黒日売の帰国をのぞみ見られておよみになったお歌。「沖方には」。
- 一三 仁徳天皇が黒日売をおたづねになっておよみになったお歌。「山県に」。
- 一四 黒日売が仁徳天皇に献ったお別れの歌二首。「倭方に」「倭方に」。
- 一五 仁徳天皇が鳥山をつかはして大后にお送りになったお歌。「山城に」。
- 一六 大后に仕へる口日売が兄をおもってよんだ歌。「山代の」。
- 一七 仁徳天皇が八田若郎女を恋しく思はれておよみになったお歌二首。「八田の」「八田の」。
- 一八 女鳥王の反乱の歌。「雲雀は」。
- 一九 速総別王の悲恋の歌七首。「梯立の」「梯立の」。
- 二〇 履中天皇が墨江中王の反乱に遭って逃げられた時のお歌三首。「丹比野に」「はにふ坂」「大坂に」。
- 二一 木梨之輕太子の悲恋のお歌二首。「笹葉に」「うるはしと」。
- 二二 輕太子をお助けした大前小前宿弥と穴穂御子（安康天皇）との贈答の二首。「大前小前宿弥が」「宮人の」。
- 二三 輕太子のお歌二首。「天飛む」「天飛む」。
- 二四 衣通王のお歌二首。「大君を」「夏草の」。
- 二五 雄略天皇が引田部赤猪子に賜ったお歌二首。「御室の」「引田の」。
- 二六 赤猪子がお答へ申しあげた歌二首。「御室に」「日下江の」。

二七 雄略天皇が吉野川のほとりにお会ひになった童女をお宮にお召しになって、後、およみになったお歌一首。「あぐり居の」。

二八 雄略天皇が袁杼比売の岡辺に逃げかくれたのを御覧になられておよみになったお歌一首。「乙女の」。

二九 袁祗命（顕宗天皇）と志毘臣との歌垣の歌。「大君の」「潮瀬の」「大君の」「大魚よし」。

三〇 顕宗天皇が置目老媪のことをおよみになったお歌一首。「浅茅原」。

三一 顕宗天皇が置目老媪の帰郷を悲しまれておよみになったお歌一首。「置目もや」。

右の項目的羅列をみただけでも、『古事記』の中に出てくる和歌が、戦ひといふ国の大事から、愛と死といふ人生の大事に至るまで、あらゆる場面にあらはれてくることがわかる。悲恋の歌や別離の歌が多いのは、その悲しみに徹するところから歌が生れてくることを語るものであらう。同時にそれは、さうした悲哀にたへる道を和歌の中に見出した古代日本の祖先の、現実随順のを示したものとといふことができるであらう。そして、『古事記』の歌謡は、ほとんどすべてが、すばらしい歌謡である。これが、『万葉集』に歌を残した人々の語り継いだ「古事」——精神の伝統だったのである。

四 『万葉集』について

小林秀雄氏の「忠臣蔵」といふ文章の中にかういふ一節があった。それは、浅野内匠頭が、切腹の前に詠んだ和歌について述べられた箇所である。

「彼は、たしかに或る異様な心理状態に在ったが、ただ在ったのではない。同時に、否でもこれを承知してゐた。私の身も心も病んでゐると意識する、その私の意識が病んでゐる筈はない。思ひ知った彼の意識が異様な筈はない。この意識には、或る現実的な苦痛があるといふより他、その内容を規定し難いといふ点で、異様なだけである。

私は、この思ひ知った男を、哲学者に見立てる積りはない。その必要もない。彼は彼なりに、その心事を処理した。歌人となつた彼は庭前の桜を眺めたかも知れぬ。だが、もう暇もなかつた。――

『風さそふ、花よりもなほ我はまた、春の名残を如何にとかせん』――云々』

浅野内匠頭が辞世の歌を詠んだことに対するこの解説は、言ってみれば、すべての真実の和歌の生れてくる心事に対しての解説と言つてよいであらう。己みが見たい思ひを、歌によむことによつて「処理」するといふ、人生の道としての和歌の真髓がここに語られてゐると思ふ。

ソクラテスは毒杯を飲むに至るまで、人々との対話によつてその死の哲学を語つた。内匠頭は、その死の思ひを和歌に表現したのである。つまり、和歌は哲学の代りをしたといふことができよう。

さう言へば、ソクラテスの哲学を語つたプラトンの対話篇は、多くその対話の相手の名前をもつて呼ばれてゐるが、副題がついてゐる。――「勇氣について」とか「道徳について」とか「死について」とか「愛について」とか「美について」とか「自然について」とか。――つまりは人の生きる道について語られてゐるのである。さうすれば、和歌は、自分自身との対話とみるものをも含めて、それはやはり人間の生き方についての感想・意識であるとするほかはない。それは、人々がそれぞれ自分自身の経験を詠むといふ意味では個性的であるが、作者がそれぞれ「愛について」「死について」「勇氣について」「道徳について」「自然について」「美について」「経験したことを言葉によつて

「思ひ知る」はたらきをしたことになるのである。

『万葉集』が、「相聞」(恋愛)「挽歌」「羈旅」「雜」といふやうな分類をしてゐるのを、「愛について」とか「死について」とか「旅について」とか読み代へてみると、そこに、わが国古代の人々の味はった人生の眞実が、詠まれてゐるのだと考へることができはらずである。

しかも、『万葉集』には、よく知られてゐるやうに、あらゆる階層の人々の歌がある。それは、男女・老若の差別もなく、都市の住人と地方の住人との差別もなく、天皇から無名の民まで、あらゆる日本人の歌を網羅したといふ点で、世界の奇蹟と見られる歌集なのである。したがって、『万葉集』の歌とは、言ってみれば、奈良時代を中心にして、当時のあらゆる身分の老若男女が、それぞれに、苦しみなやみ悲しみ憤り嘆き、よろこびたのしみやすらひ和んだ、その心持をあらはした歌なのである。もし、その歌がなかったら、その人はちがった道を行つたであらうやうな、さういふ眞実の歌にみちてゐるのであつて、これが、「言霊の幸はふ国」と言はれた本当の意味であらう。哲学によつて安心立命を得るかはりに、和歌によつて安心立命をえたのである。

私は若い頃から『万葉集』は熟読したし、『万葉集』の講義をしたりしたから、その中の何十首かは暗記してゐると思ふ。そして結局、何を学んだのだらう、と考へてみると、作者の心持を学んだのだといふほかに答へやうはない。作者が異れば歌も異なるのだから、沢山の人から学んだことになるが、要するに、好きな歌は何回も心の中で読み返して、その心持に自分の心が同化するまで読むのである。恋愛の歌には恋愛の心の持ちやうを学び、別離の悲しみを詠じた歌からは別離の悲しみかたを学んだといふことになる。自然の受けとり方はもちろん、死についても、追悼と辞世の歌から学んだのである。ことに、われわれの時代は、兵士として徴集された時代であるから、「防人の歌」から、

多くのものを私は学んだ。われわれと同じやうに「名もなき民」として生活しながら、「大君のみことかしこみ」「父母をおきて」「辺境の防衛に出て征った人々の歌から、兵士となって国を守る覚悟を学んだのである。日本人の生き方——生きる意味の感じ方——といふ点で、『万葉集』は、その歌人たちの作歌の意図とは別に、それは、正に、日本人の生き方感じ方について「教へ」の書といふことができると思ふ。この基礎に立って、ギリシャの「哲人政治」に代る「歌人政治」といふ理想が、日本人の默契となったにちがひないのである。

山上憶良が、「好去好来の歌」(『万葉集』巻五)の冒頭に、

神代より 言ひつてけらく 空みつ 大和の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語りつぎ 言ひつ
がひけり 今の代の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり

と歌った、日本国民としての自覚は、『万葉集』といふ偉大な歌集を生み出した国民思想の自覚・自意識であると言ふことができよう(『国民同胞』一四六、七号所載、拙論「皇神の厳しき国、言霊の幸はふ国」参照)。

また『万葉集』において短歌の形式が確立したことも見落すことのできない事実である。非定型の歌謡、長歌、旋頭歌、片歌などさまざまな形式が生れたが、やがて短歌の形式がその中心をなすやうになり、また民衆化し一般化するやうになって、爾後の日本の詩歌・文学のバックボーンとなるのである。

五 敷島の道の自覚

『万葉集』以後、和歌についての意識が強く表面に出たのは言ふまでもなく、『古今集』(九〇五年)で、その和文の

序文に、

「やまとうたは、人のこころをたねとして、よろづのことはとぞなれりける」

とある。「やまとうた」は、漢詩に対する語で、「倭歌」「和歌」の意味であり、「ことのは」も同じ意味である。その和歌のはたらきについて、

「ちからをもいれずしてあめつちを動かし、めにみえぬ鬼神をもあはれとおもはせ、おとこをむなのなかをもやらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるはうたなり。」

と書いてある。「ちからをもいれずしてあめつちをうごかし」といふのは、例へば、雨を祈る歌によって雨を呼ぶやうなことをいふのだらう。「めに見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ」は、歌の心が神仏に通ずることを言ふのである。「男女のなかを和らげる」のは恋愛の歌であり、武士さへも歌を心のなぐさめとするといふのである。これを少しづつ読み代へて、天地神仏に通ふまでまごころを尽し、男女の愛情を浄化し、死に直面した孤独な魂の宗教的ななぐさめとなる、これが和歌であるといふふうには読むと、「和歌」の人生の道としての意味は、この「序文」に尽されてあると思ふほどである。しかし、この「序文」では、「和歌」を「やまとうた」「うた」「ことのは」とは言ふが、「みち(道)」とは言はない(ただ漢文の序には「斯道」と言つて「道」といふ言葉が使はれてゐる)。

「しきしまのみち」といふ言葉が「和歌」のこととしてはじめてあらはれるのは『千載和歌集』の序文においてであるらしい。『千載和歌集』は後白河法皇の院宣によって藤原俊成の撰した勅撰和歌集で、奏上は後鳥羽天皇の御代の文治四年(一一八八)であるといふ。その中に、

「わが君世をしろしめして…(中略)…敷島の道も盛りに起りて、心の泉古よりも深く、詞の林昔よりも茂し、こ

ここに今の世の道を好む輩の言の葉をも聞こしめし……」

とある。俊成は崇徳院憶念の心の中にこの語を用ひたもののやうである。

『古今集』とならんで和歌の模範とされる『新古今集』の序文には、さらに堂々とこの言葉が用ひられてゐる。その内容については、

「色にふけり心をふるなかだちとし、世ををさめ民をやはらぐる道」と書いてゐる。

『新古今集』の編纂された時代は、平安末期から鎌倉時代へかけての時代で、国語についての自覚が強く深くなつた時代である。慈円の『愚管抄』や、道元、親鸞、日蓮など宗教家が、国語で文章を書き、またそれを自覚して行つた時代でもある。当時の代表的な歌人の歌の中に、

これのみぞ人の国よりつたはらで神代をうけし敷島の道

といふ歌がある。定家の孫に当る冷泉為相の歌である。儒教や仏教は外国から伝来したが、「敷島の道」は、日本本来の道であるといふ自覚である。

三代将軍・源実朝の『金槐和歌集』を見ると、神道思想と仏教思想と忠孝の思想が、極めて自由に詠まれてゐる。和歌によつて、つまり体験によつて、神・儒・仏の思想を総合したといふことができる。そして、公家が歌を詠むといふ伝統は、ついで武將の詠歌の伝統ともなつたのである。その精華は、豊臣秀吉が、聚楽第に後陽成天皇の行幸を仰ぎ、武將をして和歌を詠せしめたことに、あらはれてゐる。

六 神儒仏三道を連接するもの

前述のやうに、山上憶良が「好去好來の歌」に書きとどめた「皇神の敵しき国 言靈の幸はふ国」といふ信仰は、天照大神の御子孫が日本の國を統治せられるといふ信仰と和歌の道とが一体になってゐるといふ、日本の國の國がらについての信仰であると思ふ。「皇神の敵しき國」の歴史は『古事記』に語られ、そこに登場する神々に対する信仰は『祝詞』に示され、さらに御代御代の天皇の御言葉は『宣命』にあらはされてゐる。これが言はば「建國の精神」とその伝承であるから、この日本國の統一の精神を「神道」と呼ぶのは、宗派神道と混同されるおそれがあるので、ここでは「神ながらの道」と呼んでおく。この「神ながらの道」は、祖先神の祭祀を中核とする神社信仰でもあって、祖先崇拜の民族精神にもとづく日本民族固有の宗教である。

『万葉集』の歌をみると、建國の神話に対する信仰と神々祖先に対する信仰が詠まれた歌が多く、和歌の起源そのものもこれを須佐之男命の神詠に求めたのであるから、「神ながらの道」と「言のはの道」とは、云はば内容と表現との關係で、全く一つのものとして考へられてゐるのである。憶良はそのことを言つてゐるので、当然と言へば当然と言へよう。

儒教は、神話に対する態度とか、革命禪讓の思想とかは、日本の固有の信念とは非常なちがひをもつてゐるので、その点で、日本の政治思想に大きな影響を与へ、日本人はこの思想と格闘しなければならなくなったが、一般的には宗教に対しては関心が薄く、主として現実人生の倫理に重点を置いたので、その点では、和歌と相容れないことはい。応神天皇の御代に日本に論語・千字文を伝へたとされる王仁が、後に、難波津（習字に用ゐられた歌）の作者とさ

れた(『古今集』序)ことなどは、儒教思想が比較的容易に日本人の倫理思想に混融され、和歌に詠じられたことからはれてあらう。

仏教思想については、その導入に際して、固有思想との対決があった(物部・中臣の反対)ことから、儒教思想の導入よりもはげしい、非常な苦闘がつづくのである。その最初のお方は聖徳太子であるが、太子御自身は、三首の和歌をおのこしになってをられる。片岡山の御歌(『日本書紀』)、「家にあらば」(『万葉集』)、「いかるがの」(『法王帝説』)の三首である。みな痛切な思ひをおのべになられた(拙稿「聖徳太子御歌考」昭和三十九年三月『亜細亜大学・諸学紀要』所載)挽歌・追悼のお歌である。また聖徳太子がおなくなりになると、時の人は、太子は天寿国・浄土に昇られたと信じたが(『日本書紀』『天寿国曼陀羅繡帳銘』『法隆寺金堂釈迦如来光背銘』)、同時に巨勢三杖大夫の伝統思想による挽歌三首(『法王帝説』)をも残してゐる。仏教思想と固有の表現との間に何ら矛盾を感じてゐなかつたのである。

『万葉集』には僧尼の歌もあり、また仏教思想の影響と思はれる人生無常の思想もよまれ、大伴旅人の仏教思想批判とも言へる「酒を讀むる歌」などがある。平安時代になると最澄の歌をはじめ僧が歌を詠むことは普通のこととなり僧侶の歌集も出るやうになって、仏教思想と和歌との関係は一層深いものになった。前述の、鎌倉初期の国語の自覚時代になると、明恵、道元、慈円などには歌集がある。西行などは歌人だが僧侶だからかわからない。

この和歌と仏教との関係については、無住法師の『沙石集』に次のやうに記されてゐるのが参考になる。

「和歌の道ふかき理ある事——和歌の一道を思ひとくに、散乱龜動の心をやすめ、寂然静閑なる徳あり。又言すくなくして、心をふくめり。惣持の義あるべし。惣持といふは即ち陀羅尼なり。我朝の神は、仏菩薩の垂跡、応身の随一なり。素盞雄尊、すでに出雲八重垣の、三十一文字の詠を始め給へり。仏のことばに、ことなるべからず。天

竺の陀羅尼も、只、其の国の人の詞也。仏これをもて、陀羅尼を説きたまへり。……仏もし我国にも出給はば、只和国の詞以て陀羅尼とし給ふべし。」(巻五「和歌ノ道ヲカキ理アル事」)

神仏習合の思想は遂に和歌を以て伝言——陀羅尼とするといふ思想を生んだのである。

平安貴族の教養と鎌倉武士の教養とは異なるが、和歌については継承された。殊に源氏三代將軍源実朝は不朽の歌を数多く残した。やがて和歌は武家社会にも滲透し、南北朝時代を経て戦国時代に至ると、武将の中に実生活の苦闘から生れた名歌を残す人物が数多く出現するに至った(川田順『南朝の悲歌』『戦国時代和歌集』)この機運を総合して、豊臣秀吉は、聚楽第に後陽成天皇をおむかへして公卿武將をして和歌を献ぜしめたのである。ここに万葉精神は復活したと言つても過言ではあるまい。

近世国学の祖、契沖は、加藤清正の家老の孫である。真言宗の僧侶となつたが、木下長嘯子の弟子・下河辺長流と親交を結んで「国学」を開拓して、『万葉代匠記』を書き、さらに記紀の歌謡の研究註釈書を書いたが、序文の中に、「神道・儒教・仏法三道ヲ連接シテ、恰モ緯ニ似タル者ハ唯倭歌ノミ。斯ニ知リヌ、倭歌ノ用、皇ナル哉、遠イ哉。」(『厚顔抄』序)

と、言つたのである。これは日本思想史展開に対する契沖の歴史哲学である。

この信念は、賀茂真淵、田安宗武、本居宣長、鹿持雅澄と連なり、明治維新の志士たちへと伝へられ実践されてゆくが、この国学と和歌——といふより和歌中心の国学の流れについて、ならびに御歴代御製については別に稿を改めることにしたい。道としての和歌の展開のごくあらずを、日本思想の史的展開の中にとどめてみたのである。日本思想史はこの道を無視して説くことはできないはずである。